

書籍論考

『Raptor Medicine, Surgery, and Rehabilitation 2nd Ed.』

(Scott, D. E. 著, CABI, UK, 2017年刊, pp. 326)

西 春季, 浅川 満彦[†]

酪農学園大学獣医学群

ゼミ配属時にどのような動物の寄生虫病をテーマにしたいのかと訊いて、猛禽類と答える学生は少ない。実際、猛禽類をテーマとするのはしんどいが、それを覚悟で、今回の新人(西)も希望している。ならばそれなりの覚悟があると判断し、少々タフな新人研修課題として本書を手渡した。まず、前半で当該ゼミ生による本書概要紹介を示し、次いで、後半では浅川が大学教育、特に寄生虫病学と野生動物学で使用する場合、参考資料としての応用の可否について論じた。(浅川 文責)

本書本文は猛禽類の保定と身体検査、形態と生理(骨格、筋、内臓など)、種概要(浅川、後述)、輸液療法(経口および経骨髄の他、採血法、翼・脚・尾羽の包帯術、跗蹠の損傷、ネブライザーの使用法、安楽死法)、眼科(次の段落に示した)、感染症(浅川、後述)、その他疾病(気嚢損傷による皮下気腫、ワルファリン中毒、趾瘤症、クロアカ脱、卵停滞、鉛中毒、殺虫剤中毒などの他、外部寄生虫症; 浅川、後述)、麻酔、軟部組織の損傷と治療法、骨折治療、内視鏡(浅川、一部後述)、雛と卵(人工的な巣や刷り込み防止の給餌法)、羽と齢査定(換羽、blood feather、feather bar、眼色、羽移植術など)、臨床病理検査(血球の形態と血漿・血清成分正常値)、飼育(ケージ、過長嘴の修整法など)、捕獲、放鳥の全17章で構成され、付録として給餌用

の餌・量および投与実績のある薬物・量の一覧表、麻酔記録様式例、保定用ベストとその使用法、米国と英国の関連法規、欧米で飼育される代表的な6種の週齢・月齢ごとの体重、参考書籍・webサイト一覧が追記されていた。まさに、猛禽類医学の基礎から応用までカバーされた書と云えよう。

特に、私(西)が興味を抱いた眼科では、オウム類と比較しつつ、タカ類とフクロウ類の眼球の形態・生理の差異について記載されていた(読み込みの途中、眼自体の基本的構造が判っていないと理解が困難なことに気付き、急遽、解剖学の復習をした)。網膜瘻の形態・機能に続き、ブドウ膜炎、白内障、脈絡網膜炎などの内科的疾患の原因や治療、外科的処置、片眼個体の放鳥における検査法などが記述されていた。自分(西)は獣医師を目指し大学に通っているが、それでもこの本を読み理解をする為にかなりの時間を費やした。まして、獣医学の基礎知識が無い方が、本書内容を理解するのは困難であろう(美しいハクトウワシの表紙にだけ魅かれて購入すると積読になると言う事である)。今後、ゼミでの研究活動が本格的になると思うが、もし、猛禽類を対象にしたテーマになるとしたら手放せないと感じた。(西 文責)

感染症を扱った章に内部寄生虫(病)の項目があり、血液原虫各属(*Hemoproteus*, *Leukocytozoon*,

[†]連絡責任者: 浅川満彦(酪農学園大学) 〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地 E-mail: askam@rakuno.ac.jp

Plasmodium)、*Eimeria*属と*Isospora*属の他、猛禽類で重要な*Caryospora*属寄生によるコクシジウム症、*Trichomonas gallinae*を保有するハト類等捕食によるトリコモナス症、*Capillaria*属線虫寄生による毛細線虫症(評者註:旧来、*Capillaria*属とされた線虫類は複数の属に分かれ、本書のように消化管に寄生するものでは*Eucoleus*属か*Aonchotheca*属等の可能性がある)および線虫*Syngamus trachea*寄生による開嘴虫症が詳述されていた。それぞれの病変とオーシスト・虫卵等の写真があり、診療現場では助かるであろう。特に、開嘴虫症では気嚢に寄生している状態の内視鏡像が評者は気に入ったが、著者ご自身もそうなのか、まったく同じ画像写真が内視鏡の章(p214)でも使用されていたのはご愛嬌か。ただし、猛禽類にはその食性(すなわち、摂食される中間宿主・待機宿主が昆虫類、魚類あるいは哺乳類)により、独特な蠕虫相が観察される。このあたりのことは、評者(浅川)らが補遺することにした。なお、この章では寄生虫以外に、この他の病原体として鳥インフルエンザウイルス、ヘルペスウイルス、パラミクソウイルス-1(ニューカッスル病)、西ナイル熱ウイルス、鳥ポックスウイルス、クラミジア、鳥結核菌、アスペルギルス、カンディダも言及されていた。

しかし、シアノバクテリアによる毒素を摂取したことによる中毒と目されるAvian Vacuolar Myelinopathy(中枢神経組織の空胞変性)を感染症(の章)にカテゴライズされるのは疾病論的に不適切で、次の「その他疾病」の章に配置した方が望ましい。なお、外部寄生虫症の方はそちらの章で触れられ、マダニ類(ticks)およびハジラミ類の他、体表損傷部に生じた蠅蛆症が強烈な写真付で解説されていた。なお、評者らはコノハズク類の眼球周囲組織に侵入したヒル類による疾病や皮下・気管等に寄生する小さなダニ類(mites)も珍しくない。そうなるとう寄生虫を外部・内部で分けるのは難しいことは自明であるので、病原体の分類体系に則した記述が適切であると感じた(改訂版での整理を望みたい)。

野生動物学を兼務する立場として感ずることが、個々の動物種の情報を知らない学生に、どのようにして生物多様性、希少種保全、保護管理などを効果的に教えるかである。taxa by taxa形式で各動物種の性状を粛々として教えれば良いのだが、コアカりにそのような内容は無い。大学の学問と博物学的枚挙教育とは相容れないという証左である。しかし、種概要の章は各大陸別に計577種の体重、食性、生息環境、繁殖様式などの枚挙で、本書総頁の約20%の頁(p21からp80)が割かれた点は注目された。しかし、使い勝手はどうだろう。試しに、2018年10月開催の鳥類臨床研究会第22回年次大会でアフリカオオコノハズク(*Ptilopsis leucotis*)の栄養性疾患と報告があったので、この種の記載場所を本書末尾索引で探した。まず、英語一般名(ABC順)には、この種は未記載であった。仕方ないので、一覧表のアフリカ大陸に列挙された鳥類学名を逐一チェック、p30にNorthern white-faced owlの英語一般名の項に当該学名を発見。その食性の欄に「無脊椎動物と小脊椎動物(爬虫類・鳥類・哺乳類)」と記されていた。確かに便利だが、一般名は恣意的なものであるので、索引は学名順にした方が断然使い勝手が良い。改訂版に期待しよう。

いずれにせよ、多様な動物を扱う医療に近道はない。だからこそ、アンチ博物学では限界が生ずる。これは鳥類医学に限ったことではなく、野生動物医学全般に通ずる。あらためて、本書でこの基本を再確認出来た。なお、この章は一覧表で構成され、画像は一切無く図鑑を楽しむような味わいは出来ない。だが、猛禽類を飼育あるいは生業として直接・間接的に関わる方にも不可欠情報満載である。ゼミ生(西)は獣医師のみ活用可能なような感想を前述したが、本書英語は比較的判りやすく、(この章に限らず)内容も適度な深さなので、他分野の方々にも十分理解可能である。もちろん、当該ゼミ生(西)も2年半後の卒業時には、ほぼ完璧に本書を使いこなせるであろう(と、期待したい)。(浅川 文責)